

S. Swamoto

神学と人文（大阪キリスト教短期大学紀要）第36集 1996年12月発行 抜刷

聖餐祈祷についての一考察

—『祈祷書』聖餐祈祷文のある軌跡をたどって—

岩 本 助 成

聖餐祈禱についての一考察

—『祈禱書』聖餐祈禱文のある軌跡をたどって—

岩本助成

I はじめに

筆者が属する日本フリーメソジスト教団は、本年、わが国における宣教開始100周年の記念すべき年を迎えた。「日本フリーメソジスト教団式文」（以下、『式文』と略記）は、一定の試用期間を経て、100周年記念事業の一環として改訂出版される運びとなった。

『式文』は、その源を『イングランド国教会祈禱書』（The Book of Common Prayer、以下、『祈禱書』と略記）にもつ。その後、メソジスト運動の祖、ジョン・ウェスリ（John Wesley）が北米メソジスト教徒のために、いわゆる『第5祈禱書』（1662年）を改訂して編み直した“Sunday Service of the Methodists in North America” 1784年、（以下、SSと略記）を起点に、『米国メソジスト教会礼拝書』や『北米フリーメソジスト教会礼拝書』と分岐しながら、今日の『式文』の形を取るに至った。『式文』は観点を改めて見るならば、『祈禱書』やその「聖餐祈禱文」が描いたある軌跡でもある。日本フリーメソジスト教団は、信仰的伝統は「福音主義」（Evangelicalism）の系譜に属し、米国でのホーリネス運動（Holiness movement）の流れを汲む。しかし、教団の『式文』には、他の福音派教会のそれとは異なって、『祈禱書』の聖餐祈禱文が色濃く残されている。したがって、礼拝史的に見て、キリスト教会の古典的伝統の香りが高い礼拝式文書の一つを継承しているわけである。

『式文』を改訂出版する機会に、「聖餐祈禱文についての解説」を書いてほしいという要望を受けた。伝道牧会の現場にある方々の要望にこたえ、われわれのところにもまでもたらされた

『式文』の「聖餐祈禱文」の軌跡をたどってみたい。「聖なる感謝の儀」を執り行うとき、ただ式文を儀文的に朗読するだけでなく、その祈りの一つ一つに教会的で霊的な伝統が込められていることを味わいながら、ともに聖餐にあずかる身となりたい。『祈禱書』は、SSも同様であるが、「主日朝夕の礼拝生活」、「朝夕の祈りの生活」、特に、日々の「聖書日課、詩編」を含む生活全体を支える基本的な書物である。『祈禱書』の歴史や『式文』全体の学びをさらに深めて、総合的な解説を試みる機会を得たく願っている。⁽¹⁾

さて、『式文』のルーツを探っていくとき、『祈禱書』のほかに、もう一つの書物と出合う。それは上述の書、すなわち、1784年、ジョン・ウェスリが「荒れ野にさ迷う羊のような」北米メソジスト教徒を、健全で正しい礼拝生活の中で育てるために、『祈禱書』から編み出したSSなる礼拝書である。しかし、SSはどのような過程から出来たものか。この点をまず概観しておこう。ウェスリと『祈禱書』との関係についての学びである。前半におけるこのような準備的考察を経た上で、本小論後半では『第1祈禱書』（1549年）と『第2祈禱書』（1552年）から『第5祈禱書』（1662年）への変遷を考えながら、『式文』の聖餐祈禱文ごとに解説していく。終わりに今後、行われるであろう『式文』の大幅な改訂、特に「聖餐祈禱文」の改正に向けて、二三の提言を示して、本小論を結ぶことにしたい。

II ウェスリと『祈禱書』

「わたしはイングランド国教会人です（I am a Church-of-England man.）。50年前、そう言いまし

たが、今も同じことを申します。国教会にあって、押しつけられることなしにわたしは生き、死んでいきたいのです。』⁽²⁾85歳に達した彼のこの手紙の言葉が示すように、ウェスリは、『祈禱書』の靈的伝統の中で生まれ、育てられ、自ら司祭として生涯、『祈禱書』の祈りを真実に祈ろうと努めた。まさに「生粋のイングランド国教会人」と言うべきであろう。彼は『祈禱書』に対してどのような態度を保ち続けたか。この課題に関しては、ベイカー(Frank Baker)が、その著書に「補遺」として付けた“Ought we to separate from the Church of England?”なるウェスリの文書が興味深い。また、以下で考察するウェスリの説教「恵み的手段」は、その態度の一端を示す。ベイカーのほかに、レイモンド・ジョージ(A. Raymond George)、パウマー(John C. Bowmer)、および、ホワイト(James F. White)らの研究も貴重なものである。⁽³⁾

「わたしは、『イングランド国教会祈禱書』以上に、明晰で信頼性に富み、聖書的で、理にかなった敬虔に息づいている典礼は、古代語でも近代語でも、世界中の他のどこにも存在しないと信じています。その多くの部分が、二百年、あるいはそれ以前に作られたものであったとしても、その言語は純粹であるばかりか、最高度に明解であり気品に富んだものを宿しています。』⁽⁴⁾

ジョン・ウェスリのこの文章は、「SSの序文」(1784年9月9日付け)に記されている。彼は聖書に次いで『祈禱書』を敬愛した。栄誉ある母教会の礼拝と生活の一切は、『祈禱書』によって成り立っている敬虔にほかならないとも信じていた。自らイングランド国教会の司祭やオックスフォード大学の教師、研究員であるからという表面的な理由で、『祈禱書』そのものを尊んだわけではない。一例を挙げてみよう。彼が式文祈禱とともに、「即席で自由な表現の祈禱(extemporaneous prayers)」を奨励したことは周知の通りである。この点でも、当時の国教会関係者から、過激で逸脱した聖職者という烙印を押されたことも事実であろう。しかしながら、当時の非国教徒指導者のある者たちが、即席祈禱の優

れた技巧や、美辞麗句を用いて即席祈禱を長く続けることに腐心していたとすれば、それらはまさに、ウェスリがもっとも嫌ったものであったのである。彼は国教会の礼拝から締め出されて、即席祈禱を励む環境での伝道に携わらざるを得なかった事情を訴えている。⁽⁵⁾また、「わたしそのものは、非国教徒のフォーマルな即席祈禱よりも、国教会における祈りの方に、よりのちを見出す」とも述べて、非国教徒的傾向とはまったく逆の面を示している。⁽⁶⁾

他方、彼は『祈禱書』をただ単に遵奉していたというわけではない。彼が『祈禱書』に対し次第に批判を強めていった経過と理由を、まず考察してみたい。

(1)彼は「祈禱書改正」を提言する書物に出会う。1750年に読んだジョーンズ(John Jones)の“Free and Candid Disquisitions relating to the Church of England”などが好例である。ジョーンズは、祈禱書に今なお残存するローマ・カトリック的要素を批判し、攻撃の余勢をかって『39カ条』の改正をも提唱した。ウェスリは同書の読後感を「日記」に残している。「疑いもなく至って優れた著作である。しかし、本書のある部分を推薦するわけには行かない。著者は、わたしに対する過大でおざなりな称賛を浴びせる。ところが、『祈禱書』に関しては、そのようなお世辞の罪は実際、犯していないようだ。彼の十の異論のうち、一つくらいは重要なものがあり、五つの異論のうち、一つくらいはまことしやかな異論もある。彼の風刺のほとんどは峻烈なものだが、正しいものであるとは断言できない。…もしわたしたちが『祈禱書』を見捨てるならば、その代わりにどんな立場の書物によって益を受ける望みをつなぐことが出来ようか。わたしたちが持っている祈禱以上に、普遍性に富んだ式文を、誰がわたしたちに補充してくれると言うのか。」⁽⁷⁾彼は『祈禱書』の改正に関心を抱きつつも、改正論のうちのある種のもので、ユニテリアン神学に迷い込みやすいこと、また、結局は信仰箇条や祈禱書の「改悪」に行き着いてしまう危険性を見破っていた。

(2)そのような彼ではあるが、過去の歴史を学ぶうちに、王政復古下、『祈禱書』の厳守を含む『統一令』など諸法令のもとで、多くの理不尽な迫害や抑圧が非国教徒に加えられた事実をも知るようになる。ピューリタンによる抵抗運動にもある種の共感を覚えた。例えば、1754年8月5日、バックスター(Baxter)の『同時代史』の簡約本を読み、当時の宗教的弾圧状況を知るとともに、自分の父方の祖父が抑圧によって受難した事実をも教えられた。もちろん、ウェスリだけが突出して、当時の非国教徒に同調的であったわけではない。また、他の国教会聖職者に勝って『信仰箇条』や『祈禱書』に批判的であったわけでもない。むしろ、彼は『祈禱書』や『信仰箇条』を尊重するがゆえに、その改正を穏健な形で考え始めていて、その批判的継承を模索していたと言うべきであろう。

(3)ウェスリの後継者と目されていたフレッチャー(John Fletcher)が、『祈禱書』から「メソジスト教徒のための新しい礼拝書」を生み出す試みをウェスリに提案していた事実がある。⁽⁸⁾国教会内で、日々に勢力を増してくるメソジストの群れをどのように指導するかは、彼ら指導者たちが直面していた課題であった。国教会から離脱せよとの声は、年々、強くなって行きこそすれ、決して弱まることはなかった。ジョン・ウェスリは、頑強な国教会遵奉派であった弟チャールズとは微妙な違いを見せつつも、その基本方針においては「国教会からの非分離」を譲らなかつた。ここで、メソジスト・ソサエティ会員の現実的な教会生活を考えて見よう。彼らは国教会で聖餐礼拝式を守り、朝禱や夕禱を守る。その上、メソジスト・チャペルにおける午後や夜の集会を守った。全くの二重生活を強いられていた。しかも、彼らは国教会での礼拝や説教や教会生活において、つねに激しい攻撃にさらされた。国教会側の批判攻撃に抵抗しながら、非分離を守り通すことの困難が年々増していった。ウェスリが説く主日毎の聖餐遵守の教えは、逆に、自派の司祭による聖餐執行への切実な要望となって返ってきた。その上、アメリカ独立戦争が激化す

る現地におかれているメソジスト教徒の場合は、より困難な状況に直面していたわけである。

1775年、フレッチャーはウェスリに対して14項目に及ぶ提案を出す。それは、「イングランド国教会という母教会からあくまでも分離しない形を守りつつ、同時に、自分たちのソサエティの神学的立場を貫いた『母教会から生み出された子教会の礼拝書』を作成できないだろうか」という具体的構想によるものであった。この提案の線を進めて行けば、当然、国教会からの「イングランド・メソジスト教会」の分離誕生を早めることになる。フレッチャーが構想の伏線として抱いていたのは、そのような考えではなかったか。彼はこの改革を断行できる人物は、群れの創設者であり最高指導者であるジョン・ウェスリを除いて他に誰もいないと信じていた。そして今、かつてウェスリやフレッチャーが心の中に暖めていた『祈禱書』の改正の試みが、新興国アメリカの開拓地教会において実験されることとなる。以上が、SS誕生の背景に介在する状況ではあるまいか。ジョン・ウェスリが国教会と『祈禱書』をあくまでも尊重しながらも、同時に、1784年のSS作成へと進んで行く経緯は、このような複雑な状況への理解を深めつつ解明していくほかに道をもたない。

さて、もう一つ、ウェスリの説教「恵みの手段」(The Means of Grace)の一部を検討することによって、彼が『祈禱書』に対して抱いていた考えを探り知ってみたい。「恵みの手段」なる用語自体、『第5祈禱書』に付けられたカテキズムに初めて出てきたものと言われる。彼はこの説教の終わりで、神は聖餐という恵みの手段をも越えた御方であること、どのような手段でも神を離れた手段そのものに力がないこと、「儀式を守ること自体」が救いでないことを力説する。では、手段は無視されるべきか。決してそうではない。礼典が目的化されるわけではないが、同時に、「恵み」の手段であって軽視されてもならない。「すべての手段を用いることにおいて、神様のみを求めるのです。あらゆる外的手段の中に、また、それらを通して、ただ、御霊の力と御子の

功績のみを追い求めなさい。」と語っている。⁽⁹⁾ここに「祈禱書」を尊重する姿勢と、「手段そのものと、その内なる生命的なものとを混同してはならない」とする態度とが一貫しているのを見る。

Ⅲ “Sunday Service” から「式文」への軌跡をたどって

1 SSが書かれた経緯

この点は以前にも論じたことがある。⁽¹⁰⁾本項では、SSが作成されるに至った経緯を中心に述べたい。1775年頃のウェスリの『日記』を読み進めると、独立戦争下のアメリカのメソジスト教徒に宛て、彼が数々の手紙や小冊子を書き送って指導に努めていることが分かる。また、彼の死後、トマス・コーク(Thomas Coke)が公表したところによれば、ウェスリとコークは1783年10月12日、週末会談をもったと言われる。二人の話題は、当時、アメリカにあって約60箇所の集会所で礼拝していた14,000人ほどのメソジスト教徒が、逼迫した霊的状況におかれていることについてであったらしい。ウェスリが、聖職者不足のために陪餐できないでいる教徒たちのことや、数千にのぼる未受洗のこどもたちのことを心から憂えていたと、コークは書き残している。

ウェスリは、1784年、按手礼を授けたコークらをアメリカのメソジストの群れに派遣するにあたって、「アメリカのメソジストたちのための新しい礼拝書」を編んで持たせることにした。「…わたしはイングランド国教会(世界でもっとも優れた国教会だと信じています)のものとは少し異なった礼拝書を準備したところです。すべての巡回伝道者が主の日ごとに、会衆にこれを用いることを勧めます。毎水曜日と毎金曜日には「連禱(Litany)」を読んで祈ること、その他の日は、自由な言葉での祈禱をささげるように勧めます。わたしは、また、すべての主の日ごとに、教職長老が主の晩餐を執行することを勧めるものです。…」新しい礼拝書には、1784年9月10日付けのこのような手紙が付されていた。⁽¹¹⁾

ロンドンで印刷されたというこのSS原本をめぐって、奇妙なエピソードが伝えられている。

誰が犯人かは不明であるが、原本内の数頁がなくなり、他の数頁が挿入されたい。しかし、秘密裏の手の込んだこの作業は成功しなかった。このような工作があった事実はウェスリの知るところとなった。⁽¹²⁾急を要したために原本を綴じることなくシートの束の形で渡してしまい、渡米後、ニューヨークでやっと製本したために、このような仕業をする隙を与えてしまった。結尾に、「1784年9月9日、ブリストルにおいて」と記し、ジョン・ウェスリ自身のサインが付された「序文のシート」(Ⅱ章の最初で引用したもの)が見つかった。1786年、88年、90年、彼の死後の92年にも新しい版が出され、幾通りかの「文書の表題」さえ残されているが、中には奇妙な表題さえ見出される始末である。

SSを緊急に作成して手渡した事情と、それを受け取ったアメリカのメソジストの群れの複雑な状況が、事件の原因をつくった。それはともかく、SSが『祈禱書』改定をめぐるウェスリの長年の考え方を、一部、反映していることは確かであろう。ウェスリは『第1祈禱書』を高く評価して好んでいたと言われるが、当時、使用を義務付けられていた『第5祈禱書』を簡略化し、相手の状況に合わせてSSを編纂したのである。

2 「祈禱書」とSSとの比較研究をめぐって

『第5祈禱書』とSSとがどのように相違しているかを対照して論じることは省きたい。パウマーが、相違点を5頁にわたる対照表にして研究の便を図っている。⁽¹³⁾ウェスリは『祈禱書』を大幅に改正しようとはしていない。全体的に見れば、英国本土でない北米での一般的な信徒を対象に限定して、より簡略な礼拝式を指向した。式文中の「指図書き」なども出来るだけ省略している。北米メソジストの状況に適応させる努力の跡は明らかである。“common” prayerという書名通りに「一般的な人々、普通の人々」への礼拝書を作り出そうとした。両者の違いを示す「原理的なもの」についてだけ触れておく。

(1)ウェスリが思い描いていたキリスト者生活

の全容は、神から賜る「恵みの手段」、特に、聖書、聖礼典、祈りの生活にその基礎を置くものであった。毎主日ごと(ウェスリは主日を主イエス・キリストの復活日として特に強調した)、「朝と夕との祈り」をささげ、「主の晩餐、感謝の儀」にあずかる教会生活の喜び！ここに、キリスト者生活の基盤が置かれていた。中世後期には、イースターを除いてミサには司祭のほか陪餐者がいなかったと伝えられている。【第1祈禱書】では、教会員は年1回の陪餐を規定され、【第2祈禱書】でさえ、イースターを含む年3回と定めていた。カルヴァンが毎主日の陪餐の主張を拒まれ、ジュネーヴにおいて月1回の聖餐礼拝を守った事実は周知の通りである。イングランドでも人口の多い教区教会では月1回が守られたが、他は一般的に年4回の陪餐に止まった。したがって、毎主日の礼拝式は、伝統的な「聖餐前礼拝式(プロヌ、またはブロン)」となって、毎主日の陪餐を望んだ改革者クランマーの願いは空しくなった。今、ウェスリが国教会のみならず、メソジストの群れにあって強調し、自らも実践した毎主日の陪餐とか、さらには「週日を含む陪餐の奨励」とかは、当時の一般的教会人には、想像を絶した高い霊的、礼拝的水準だったわけである。

(2)彼の礼拝書には、聖書の使用が多い。旧約聖書は朝夕ともに課せられ、詩編も多く編纂された。福音書や使徒書からの朗読箇所も多い。一箇所の例外を除くと、【外典書】からの引用が削除されている点は興味深い。

(3)祈禱や讃美も強調された。SS全体に、「救いの福音をたたえることば」が増やされた。主の日における豊かな内容の祈りのみならず、週日(水、金)においても「連禱」を祈ることが命じられ、同時に、式文に拘束されない自由な祈禱も、他の週日の祈りのために奨励された。

(4)教会暦は、クリスマス、受難日、復活日、昇天日というように、あくまでも主イエス・キリストを中心とするキリスト中心主義に改編された。

(5)幼児の場合、「洗礼による新生」が全く拒否されたわけではないが、SSにおいては神学的に

微妙な点が極めて注意深く表現されている。「洗礼堅信式」は、おそらく司教がいない状況ゆえと考えられるが、割愛されている。なお、同式はその80年後、米国メソジスト監督教会において「入会式」として再採用されるところとなり、1世紀後には、「洗礼堅信式」という名称が戻されて今日に至っている。

(6)ウェスリがSSにおいて【祈禱書】から省略したもので、筆者が問題点だと思うものがなくはない。一例を挙げれば、「信条」の省略である。ウェスリは「使徒信条」が歌われる中で、聖餐の物素が備えられることを省略したばかりか、「ニケア信条」の告白をも省略してしまった。その理由は明らかにされていない。ところが、礼拝式において信条告白が持つ意義は大きく、特に唯一の世界信条としての「ニケア信条(ニケア・コンスタンティノポリス信条)」の意義は、今日、世界中の教会において、見直されつつある。その他、「聖霊の降下と現臨を祈る」いわゆる「エピクレシスの祈り」は、讃美に代えられている。今後の研究を通して、これらの問題点を検討しながら改善していく作業が必要であろう。

3 SSから【式文】に至るまで

SSから【式文】に至る歴史的变化を詳細に跡付けることは資料の上で困難であった。ただ筆者の手元にある三つの資料を考察することによって、検討が難しかった歴史的な隙間を埋めるしかない。第1の資料は、数年前に復刻された【日本メソヂスト教會禮文】である。⁽¹⁴⁾同禮文は、1873(明治6)年、伝道を開始したカナダメソヂスト教会と、同年の米国メソヂスト監督教会、及び、1886(明治19)年、開始の米国南メソヂスト教会のいわゆる三派が合同して、「日本メソヂスト教会」を1907(明治40)年に設立したが、その際にSSから訳出作成された文書である。10年前にすでに訳出していたらしい。(なお、【日本メソヂスト教会教義及條例】も採択されたが、そこに、ウェスリが【39カ条】を簡略化して作った米国メソヂスト教会の【25カ条】を、日本の状況に合わせて取捨選択、修正加筆した【18カ条】

を入れた)。

『日本メソヂスト教會禮文』と『式文』を比較検討するとき、ルーツを同じくする両者は、当然のことながら酷似している。ただ、前者が「主の晩餐」を聖句集から始めること、陪餐の直後、「主の祈り」が祈られること、そして重要な「聖餐後感謝祈禱」が祈られていることの3点が異なっている。『式文』の聖餐祈禱文の順序をSSの祈禱文順序と比較して発見することがある。それは『式文』が直系的にSSを継承しないで、米国メソヂスト教会においてより簡略化された式文を経て、SSの式文を継承しているという事実である。

因に、SSの聖餐祈禱文の順序は、「主の祈り」、「きよめの祈り」、「十戒」(カルヴァンら大陸の改革者の影響か)、「集禱文」、「説教」、「聖句集」、「教会のためにとりなしの祈り」と続き、その上で「懺悔の祈りへの招き」、「懺悔の祈り」、「ゆるしの祈り」、「慰めの聖句集」、「スルスム・コルダ」、「サンクトゥス、讃詠類」、「近づきの祈り」、「聖別の祈り」、「制定叙述文」、「陪餐」、その後再び「主の祈り」、「聖餐後感謝祈禱」、「グローリア・イン・エクセルシス」が終わってから「祝禱」をもって終わる。⁽¹⁵⁾『式文』、つまり、上記『日本メソヂスト教會禮文』へと流れてきた米国メソヂスト教会での聖餐祈禱文の伝統的順序は、これよりも簡略な形を取っている。それは以下の考察を通して一層、証拠付けられていくであろう。

手元にあるもう二つの資料は、“Free Methodist Discipline, 1979”に付加されている式文と、英国メソヂスト教会の“The Methodist Service Book 1975”とである。⁽¹⁶⁾まず、前者であるが、その順序は、「懺悔の祈りへの招き」、「懺悔の祈り(司式者の祈りと変えられ、現代風な言い回しに改められている)」、「主の祈り」、「きよめの祈り(これがユニゾンによる共同の祈りとなっている)」、「讃詠(三聖唱はユニゾン)」、「グローリア・パトリ(ユニゾン)」、「近づきの祈り」、「聖別の祈り」、「制定叙述文」、「陪餐」、「祝禱」となっている。少しの差異はあるものの、当然『式文』とほとんど同じ内容と順序である。同じように「聖餐

後感謝祈禱」がない点と、祈りの言葉が現代風表現に直されている点に注目したい。

後者の聖餐祈禱文は、1936年の英国メソヂスト教会の合同によって定められた祈禱文(『第5祈禱書』に準拠、SSが英国に逆輸入された版と言えようか)から発している。しかも、伝統的なものを保存する形と、大幅な改正がなされた簡略な形とを選択できるように工夫している。簡略な形の方は、「きよめの祈り」がささげられ、「懺悔の祈り」が祈られ、簡潔な「ゆるしの宣言」がなされる。集禱文の後、讃詠が歌われ、聖書の朗読と説教へと続く。「とりなしの祈り」と「主の祈り」がある。「御言葉の礼拝の部分」が終わるので、退席者のために「祝福」が祈られる。「聖餐礼拝の部分」は、平和の挨拶から始まる。「ニケア信条」が告白され、聖餐の物素がささげられると、「スルスム・コルダ」が交唱される。「聖別の祈り」や「制定叙述文」、および「陪餐」も大幅に改正されている。「分餐のことば」は、新しい表現“The body of Christ given for you.” および“The blood of Christ shed for you.” という句と、伝統的な句とを選択できるように並記されている。その後、「聖餐後感謝祈禱」が祈られる。

別の形では、「主の祈り」、「集禱文」、「十戒」、「聖書日課の朗読」、「説教」、その前後に「ニケア信条」(全員起立)、「聖句集」、「とりなしの祈り」、「懺悔の祈りへの招きと懺悔の祈り」、「ゆるしの祈り」、「慰めの御言葉」、「スルスム・コルダ」、「各種の讃詠」、「近づきの祈り」、「陪餐の祈り」、「聖別の祈り」、「制定叙述文」、「分餐」(その間、司式者は聖句を繰り返し読む)、「主の祈り」、「聖餐後感謝祈禱」、「グローリア・イン・エクセルシス」、「祝禱」で終わる。かなり伝統的な形になっている。この選択制は、今後の『式文』改正への一つの示唆と言えようか。

【祈禱書】そのものの本流が何であり、どれがその支流であるかを判断することは難しい。歴史的には判断し得ても、「本流と支流」という発想そのものが問題を生み出すかも知れない。いづれにせよ、SSや『式文』の軌跡をたどることで、『祈禱書』そのものが世界に散在するア

ングリカン共同体においてだけではなく、その伝統にあずかる様々な礼拝式の中に息づいている姿を確認したわけである。では、本小論の主たる目的である、「式文」における「聖餐祈祷文」の解説へと移っていきたい。

Ⅳ 聖餐祈祷文の解説

1 懺悔への招きのことば

「まことに、自分の罪を悔い、隣人を愛し、神の戒めに従って今から後、その聖なる道を歩み、新しい行ないをしようと志している者は、信仰をもって今ここに近づき、慰めを得るためにこの聖餐を受け、慎んでひざまずき、へりくだって全能の神にざんげしなさい。」

The Invitation to Confession(またはInvitation)と呼ばれる「懺悔への招きの言葉」である。この言葉から、「懺悔の祈り」、「赦しの祈り」と続く一連の祈りは、「懺悔への招きの言葉」に出てくる「隣人への愛と寛容に満たされて」という奨めの内容や、式順序から見ても、伝統的な典礼様式における「平和の接吻」(Kiss of peace, Pax)に代わるものではないかと考えられている。古代教会のこの伝統との一致は、克蘭マーの「典礼に対するセンスの鋭さ」を示すと言う指摘もある。

克蘭マーが1548年に著した『聖餐式順序』(The Order of Communion)は、ケルンの大司教ヘルマン・フォン・ヴィード(Hermann von Wied)の名で発表された「簡潔で敬虔な見解」(Simplex et pia deliberatio, A Simple and religious Consultation)なる書物の英語版に負うところが大きかった。『聖餐式順序』全体にルター派教会式文の影響を見る学者も多いが、この懺悔への招きは、克蘭マー自身が作ったものとされている。⁽¹⁷⁾以下で四つの点を指摘したい。

(1)『聖餐式順序』でも、『第1祈祷書』においても、“…make your humble confession to almighty God, and to his holy church here gathered together in his name,…”と記され、真摯な懺悔が、神と「教会」とに対してなされるべきことが強調された。それが『第2祈祷書』では、“…make your humble confession to

almightie god, before this congregation here gathered together in his holy name,…”と変更され、「教会に対する懺悔」が、「会衆の面前での懺悔」と改められている。克蘭マーが徐々に改革色を強めていく姿をここに垣間見ることができよう。

ところが、アングリカン「福音派の憲章」と呼ばれる『第5祈祷書』においては、このくだりが全部削除されてしまう。その代わりに”Draw near with faith”(信仰をもって今ここに近づき)が挿入される。『第5祈祷書』に基づくSSを経て、『式文』も当然、それに準拠し上掲のテキストのようになっている。

(2)懺悔への招きは三つの条件を示す。罪の悔い改め、隣人への愛、神の戒めに従って今から新しい道を歩もうという意欲、つまり、悔い改め、愛、信仰の歩みの三つである。

(3)「今、ここに近づき…慎んでひざまずき」という招きは、陪餐のために進み出る会衆の動作を反映する。一般的なメソジストの陪餐方式は、陪餐者が聖卓前の手すりに並び、跪いて物素を受ける。一組が終わると後の組が続く。個人的陪餐でなく共同的陪餐を現す。跪きは陪餐における贖われた者としての謙虚を表す動作である。⁽¹⁸⁾

この招きが、本来は司祭や信徒が陪餐する直前にあったと言われる。「御言葉の礼拝」が終わり、非陪餐者が退席した後に語り出される現在の位置に定着したことは、より適切ではなかったか。カルヴァンらスイス改革派の様々な式文にも、格調高い「懺悔への備え、祈り」があるので、大陸の改革者の精神を反映した招きであり祈りである。

2 懺悔の祈り

「われらの主イエス・キリストの父、よろずの物の造り主、すべての人の審き主なる全能の神よ。

われらは、思いと言葉と行いによって罪を犯し、いくたびとなく主にそむき、主の怒りを招いたことを認め、深く悲しんで懺悔いたします。わたしたちは、犯した罪をまことに悔い、心から

なげき、これを思い起こすたびに心をいためます。この重荷にたえることはできません。憐れみ深い父、わたしたちをあわれんでください。み子、われらの主 イエス・キリストのいさおによって、過ぎ去った罪をことごとく赦し、この後、新しい行いをもってあなたに仕え、み心を喜ばせ、み名の栄光をあらわすことができますように、われらの主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン。」

General Confession(またはConfession)である。「聖餐式順序」や「第1祈禱書」において、クランマーはヘルマンからこの祈りを採った。ただし、ヘルマンでは原罪への言及があるのに対して、クランマーはそれを除いた。そのくだりへ”…we knowlege and bewaile our manyfold synnes and wyckednes, which we from tyme to tyme, most greously haue committed, by thought, word, and dede,…”を挿入した。これは古いローマ教会の懺悔祈禱文であったと言われる。五つのコメントをしておきたい。

(1)陪餐への「備え」という点である。理想的な姿としては、土曜日、つまり主日への備えの日、信徒の各家庭で、また、最寄りの信徒がそれぞれ集まって、この懺悔の祈りをささげる。主日には準備を整えた信徒が一つの聖堂に集まり、一つの聖餐を共にする。懺悔の祈りが聖餐の直前に位置しているのは、このような準備ができなかった人々も、この機会に準備を整えて聖餐にあずかるようにとの実際の配慮であると説かれる。⁽¹⁹⁾

(2)「共同の」懺悔祈禱という点を指摘したい。「式文」にも「司式者は聖餐を受けようとする人々と共に、懺悔の祈りをしなさい」との指図書きが付けられている。元来、「第1祈禱書」や「第2祈禱書」では、陪餐者の一人、または、司祭の一人、または、司式者自身がこの祈りを祈るように「指図書き」が付けられていて、共同の祈りという面が少なかった。しかし、「第5祈禱書」から、全員が声を揃えて祈る形を取るように変えられた。

(3)この祈りには、「思い、言葉、行い」という人

間生活の三方面からの罪と咎への真剣な悔い改めが溢れ出ている。詩編130編1-5を思い起こす。しかも、懺悔するというだけで満足するのではなく、「神の御名の栄光をあらわす器」として作りかえられたいという霊的更新を願う祈りに注目したい。司式する聖職者と陪餐する信徒とが、共に罪人のかしらとしての自覚を持ち、「同時に、神の憐れみの契約を堅く信じて立つ」祈りである。

(4)祈りの呼びかけ部分や「神の憐れみ」を乞う部分は、ヘルマンからの流れを汲むものと言われる。しかし、両者の違いも、また、明らかである。ヘルマンのそれは「長い説教調の祈り」から成る。また、ブランド(John H.Blunt)は「懺悔の祈りと赦しの祈り」との背景に、ヨハネ福音書の「主イエスによる弟子たちの洗足行為の記述」(ヨハネ福音書第13章1-11)を見るが、深い示唆を与える。⁽²⁰⁾

(5)「この重荷にたえることはできません。」という句をめぐって。ジョン・ウェスリは、SSでこの句を省いた。何も彼だけではなく、シェパード(Massey H.Shepherd)のような典礼学者も同様な感想を抱くかに見える。⁽²¹⁾ ウェスリがこの一句にこだわった正確な理由は分からないが、大袈裟な表現を避けただけとは考え難い。「たえることができないような重荷を負ったままで、聖餐の卓に」進むことは、神の恵みの御招きとも考え難く、また、感謝の応答としてもふさわしくないと考えたためか。ウェスリの応答的恵み(responsible grace)という神学と相容れないものを覚えたのではなからうか。⁽²²⁾

3 赦罪の祈り

「全能の神、われらの天の父よ。

主はその大いなる憐れみをもって、心から悔い改め、まことの信仰をもって主に立ち帰るすべての人の罪を赦すことを約束されました。主が、わたしたちを憐れみ、ゆるし、すべての罪から救い、わたしたちを堅くし、強めて、よい行いをさせ、永遠の生命をつがせてくださるよう、お祈りいたします。アーメン。」

Absolutionと呼ばれる。懺悔の祈りに対する「神の赦し」を宣言する内容の慰めに満ちた祈りである。古いローマ教会祈祷文から来たものか。『聖餐式順序』では、クランマーはローマ式文に従い、ヘルマンから” Our blessed Lord, who hath left power to his Church (ヘルマンでは congregation) to absolve penitent sinners from their sins, and to restore to the grace of the heavenly Father such as truly believe in Christ, have mercy…” と祈られた。しかし、『第1祈祷書』では、次のような祈りに変えられ、長い間そのように祈られてきている。” Almighty GOD, our heavenly father, who of his great mercie hath promysed forgeuennesse of synns to all them, whiche with hartye repentaunce and true fayth, turne unto him: haue mercy upon you,…”

司式者は会衆の方に向かってこの祈りを祈り、祝福の形を取る。メソジスト教会の伝統もそれに従う。司教や司祭の基本的な働きの一つは、古代教会以来、会衆を祝福し、また、聖別し、罪の赦しを宣言することにあつた。それらの一切が神御自身の憐れみと罪の赦しの約束に基づくことは申すまでもない。「悔い改めと信仰」が基盤を形造る。神の憐れみは「心から悔い改め、まことの信仰をもって、主に立ち帰るすべての人の罪を赦すことを約束され」るからである。しかも、この祈りは単なる罪の赦しの祈りに止まることなく、信仰者を「堅くし、強めて、よい行いをさせ、永遠の生命を継がせてくださる」祈りへと高められている。

ユングマンがローマ教会の典礼に触れ、回心式などとの関連を述べる点は興味深い。²³この祈りは、まず、司式者が祈って会衆に祈りを求め、会衆が司式者のために赦罪を祈る。かわって会衆が祈って司式者に代祷を求め、司式者が会衆のために赦罪を祈るという形を取っていたらしい。「それは古い修道院の夕べの礼拝で、修道院長と兄弟たちのこもごもかわしたごんげとゆるし合いの慣例に似ています。事実、中世の教会では侍者と司式者がこもごもごんげし合い、赦罪

を祈り合う習慣が守られていました」とは美しい描写である。²⁴主イエス・キリストによって莫大な負い目を赦された者が、その身に受けた小さな負い目を赦して、共に主の晩餐の食卓に招かれている姿である。

4 きよめの祈り

「全能の神。すべての人の心は主にあらわれ、あらゆる願いは主に知られ、主のみ前には、どのような秘密もかくすことはできません。どうか聖霊の恵みによってわたしたちの思いをきよめ、わたしたちが全くあなたを愛し、きよき名をただしくあがめることができますように、主イエス・キリストによってお祈りいたします。アーメン。」

特祷 (The Collect) の一つで、「どうか聖霊の働き (inspiration) によってわたしたちの思い (心) をきよめ」と祈ることから、「きよめの祈り」と呼ばれる。この祈りは第8世紀のカンタベリー修道院長グレゴリオス(約780年頃)にその起源を持つとも言われる。詩編第51編の祈りを色濃く反映する祈りである。『セーラム用典礼』(Sarum Use、ソールズベリー司教座聖堂で慣用となっていたローマ典礼様式)では、“ Veni Creator” に続く司祭の祈りであったし、聖霊の恵みを祈る連祷の一つでもあった。

この祈りの由来は、上述のように第8、9世紀のミサへ、または、より古く第4、5世紀のクリュソストモスの聖餐祈祷などへさかのぼって考える人々もいる。また、司祭が祭服をまとう際に祈る準備の祈りと考える人もいる。このほか、司式司祭の聖餐直前の準備の祈りとされる。「祈祷書の特祷でもっとも高尚な祈り」と称えられるほど人々の心に深く宿る祈りであり、暗誦して祈ることが勧められた。「全き愛」を説いたウェスリが特に心を込めて祈ったことは、「聖霊によるきよめ、神への全き愛の祈り」であることから合点がいく。

(1) 礼拝は全知全能の神への礼拝。神の御前で心を砕かれた者がささげる礼拝である。

(2) 礼拝は主イエス・キリストの御名によって、

御名を称え歌う礼拝である。きよい完全な犠牲として、十字架の上にその身をささげられた御方によってのみ、われわれの神礼拝は可能となる。

(3)礼拝は、真理の御霊であり、助け主、弁護者なる聖霊なる神にあってささげる礼拝である。総合して言えば、三位一体の神への礼拝であることが明らかにされている祈りである。「聖霊の働らきによってわれわれの心と思いがきよめられるように。また、すべてのキリスト者が、神を全く愛することができるように。そして、神のきよい御名が誤ったりみだりに唱えられるのではなく、正しくあがめられるように」という祈りは、キリスト者生活の根本精神を表した簡潔で美しい祈りと言える。

5 讃詠

「きよき父、とこしえにいます全能の神よ。いっどこにいても主に感謝することは、正しく、喜ばしいことです。わたしたちは、み使いと、み使いのかしら、および天の全会衆とともに、主の尊いみ名をあがめ、常に主をたたえてうたいます。

【聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。主の栄光は全地に満つ。いと高きところには主に栄光あれ。アーメン。】

Proper Prefaceと呼ばれる特別序唱から始まる。「歴史的に重要な礼拝式の聖餐祈禱においては、その叙唱をこの神賛美の歌「聖なるかな」で結んでいる。」²⁵⁾この讃詠の起源は定かでない。ユダヤ教のシナゴグ礼拝における「十八の祝禱」などが、初代教会の礼拝へ流れ込んだとする説がある。このほか、「クレメンスの手紙-コリントのキリスト者へ(1)-」34:6に、この讃歌が出てくる。²⁶⁾ラトクリフ(Ratcliff)は、ヒッポリュトス『使徒伝承』にも溯り得るとするが、その証拠は定め難い。むしろ、第4世紀頃のアンテリオキア、エルサレム、エジプトの諸典礼や、第6世紀頃のローマ教会典礼に、「サンクトゥス」や「ホサナ」などの讃美が見られる。また、『使徒憲章』第8巻で「ベネディクトゥス」が陪餐の前

に歌われている。²⁷⁾このほか、クリュソストモスの典礼やセラピオンの典礼にさかのぼる学者もいる。上述の『使徒伝承』でも、明らかに「創造、受肉、受難、贖罪の死、復活」のテーマが物語られているし、ガリア典礼でも東方教会の諸典礼においても、多様な讃詠が伴われていたことは事実である。

讃美とか感謝とか言うが、誰に対して讃美をささげ感謝をささげるのか。この讃詠は、「いっどこにいても正しく喜ばしい感謝」を、聖なる主なる神にささげると歌う。その上、この讃歌は天のみ使いたちや、勝利の教会に召された全会衆も共に歌いたたえる「全宇宙大に広がる霊的で終末的な讃歌」である。称えの歌は、やがて、「サンクトゥス、聖なるかな、…」という、いわゆる「三聖唱」へと高まっていく。イザヤ書6章3節やヨハネ黙示録4章8節にその起源をもつ讃美である。このような「感謝の序唱」と「三聖唱」を歌いながら、われわれはいよいよ聖餐祈禱の核心部分へと導かれていく。礼拝の中で感謝とともに心と姿勢の居住まいを正しながら中心へと入っていく。

6 陪餐の祈り

「あわれみ深い主。

わたしたちは、自分の義によらず、ただ主の限りない憐れみによって、今、主のみつくえのもとにまいりました。わたしたちは、みつくえから落ちるくずを捨てるにも値しない者ですが、主は変わることなく憐れみを施してください。

恵み深き主、わたしたちは、今、み子イエス・キリストの肉を食し、その血を飲むことによって成長し、またその最も尊い血で洗われ、わたしたちが常にキリストにあり、キリストが常にわたしたちにあるようにしてください。主イエス・キリストによってお祈りいたします。アーメン。」

The Prayer of Humble Access、「謙虚をもって主の食卓に近づく祈り」。または、「近づきの祈り」と略される。祈りの前半部分は、マタイ8:5-13における「百人隊長のしもべの癒し物語」と、「カナンの女性の娘の癒し物語」(マタイ15:21-28)を

想起させる。また、祈りの後半は、ヨハネ6:53-56の御言葉、特に、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」(56節)を思い起こさせる。今、われわれは、高擧され、栄光の座についておられる主イエス・キリストの御体と御血とに、聖霊なる神を通し信仰によってあずかる。

1548年『聖餐式順序』では、この祈りは克蘭マー自身の作として載せられた。以前のミサ式文では、司祭が聖餐を司る自らのために祈る個人的な祈りとして用いられていた。それが司式者のみならず、陪餐者のためにも祈る祈りとなっていくとされる。ある解説では、『バシリオスの典礼』、『聖ヤコブの典礼』、ダニエル書9:18、マルコ7:28、ヨハネ6:56、レビ記17:11、『ヘレフォード典礼』や『ウエストミンスター典礼』、ドイツのルター派教会の典礼、トマス・アキナス、リヨンのフロルス(Florus, c.790-c.860)、フランスのkolビー大修道院長パスカシウス・ラドベルトゥス(Paschasius Radbertus, c.785-c.860)などからの影響を述べている。⁽²⁾

1548-9年の祈りでは、祈りの後半で「これらの聖なる秘儀において(in these holy Mysteries)」という句を加えて祈られていた。『第2祈禱書』では、有名な「わたしたちが常にキリストにあり、キリストが常にわたしたちにあるようにしてください、” and that we may euermore dwell in him, and he in us”」が付加されるようになった。また、この祈りがおかれている位置であるが、『第1』では、この祈りの直後に分餐が行われた。『第2』では、この祈りの直後に「聖別祈禱文」が続く。

式順序から見て、『第1祈禱書』から『第2祈禱書』への変更は適切であったかどうかについては異議を唱える人もあろう。しかし、克蘭マー自身は、「聖餐設定叙述文」の後で直ちに陪餐すべきであると考えていたので、彼にとっては適当な変更であったと思われる。このほか、ガードナー(Stephen Gardiner)など保守派による克蘭マー批判がこの変更に影響を与えたとい

う説もあり、また、ユダヤ教における「パンとぶどう酒を祝する祈り」などの影響を考える学者もいる。いずれにせよ、創造主なる神、摂理をもって導き支える歴史の主なる神、贖罪者・完成者なる神に、神の民への救いと導きの根源を見ている。

7 聖別の祈り

「全能の神、われらの天の父よ。

あなたは、わたしたちを憐れみ、ひとり子イエス・キリストをこの世につかわし、わたしたちの贖いのために、十字架の死を受けさせてくださいました。キリストはひとたびその身をささげて、全く、きずのないいけにえとなり、供え物となり、全世界の罪を贖われました。また、この式を定めて、わたしたちが、主のふたたび来られる日まで、くり返して主の尊い死を記念するように、聖なる福音のうちにお命じになりました。

憐れみ深い父、わたしたちが、今、救い主イエス・キリストの死と苦しみを記念し、そのたてられた聖なる礼典に従い、主より与えられたこのパンとぶどう酒とを受けて、キリストの尊いからだと血とにあずかる者とならせてください。

主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われました。「取って食べよ。これはあなたがたのためのわたしのからだである。わたしを記念するためこのように行いなさい。」

食事ののち、杯をとり、感謝して彼らに与えて言われました。「みな、この杯から飲め。これは、罪の赦しを得させるようにと、あなたがたのため、また多くの人のために流すわたしの新しい契約の血である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい。」

「いわゆる『最後の晩餐』の物語を『聖餐制定のことば』として朗唱することは、原初的要素として歴史的な様式では一般的、普遍的なものともみなされている。」⁽²⁾ユスティノスの『第1弁明』(147-154年頃)66:3には「イエスはパンを取り、感謝して言われた。「わたしを記念するため、このように行いなさい。これはわたしのから

だである。」同じく杯も取り、感謝して言われた。「これはわたしの血である。」³⁰⁾が、使徒たちの福音として明記されている。³⁰⁾第3世紀シリア教会を背景とする『聖アダイとマリ典礼』には制定語が欠けていて、典礼学者の激しい議論的となる。また、ユングマンは制定語叙述の歴史的進展に三傾向を見る。

第1の傾向は、パンと杯についてなるべく同じ言葉を用いようとするものである。「感謝してこれをさき」と、「感謝して彼らに与えて」というような同じ形を指す。主だった東方教会の諸典礼は、感謝を表すギリシャ語を、「エウカリスターサス、エウロゲーサス、ハギアサス」の三つに増やしている。第2の傾向は、なるべく聖書本文に似通った形にする点であり、第3の傾向は、ローマ典礼において修飾の言葉が多くなる傾向であったと述べる。³¹⁾

ヒッポリュトスの『使徒伝承』には、「パンを取り、あなたに感謝をささげて仰せになりました。『取って食べなさい。これは、あなたがたのために碎かれるわたしのからだである』。同じように杯も取って仰せになりました。『これは、あなたがたのために流されるわたしの血である。これを行う時、わたしの記念として行いなさい』」とある。また、アンブロシウスの『秘跡』(390-1年頃)での制定語の叙述記録をも忘れてはならない。³²⁾1549年には、クランマーはあらゆる非聖書的な句を省き、ただ、新約聖書の記述を反復する簡潔な制定語を記した。” Who in the same nyght that he was betrayed: tooke breade, and when he had blessed, and geuen thanks: he brake it, and gaue it to his disciples, saying: Take, eate, this is my bodye which is geuen for you, do this in remembrance of me. Likewise after supper he toke the cuppe, and when he had geuen thanks, he gaue it to them, saying: drynk ye all of this, for this is my bloude of the newe Testament, whyche is shed for you and for many, for remission of synnes: do this as oft as you shall drinke it, in remembrance of me.”

『第5 祈禱書』では、クランマーのこの簡素な形式に「五つの動作」が加えられた。ピューリタン派と高教会派との願いの両方にこたえようとした結果、生まれた形と言われる。その動作とは、「パンを取る、杯を取る、パンを割く、パンと、杯の上に手を差し伸べる」五つである。中世教会の諸典礼からのミサ動作や『サーレム典礼』からの動作でもあった。物素の「奉拳」動作に対しては、クランマーは拒否の姿勢を貫いた。

8 分餐

「あなたがたのために与えられた、われらの主イエス・キリストのからだ、あなたがたの魂と身体とを守って、永遠の生命に至らせて下さるよう。キリストがあなたがたのために死なれたことを思い出すため、取ってこれを食べ、感謝し信仰をもってあなたがたの心を養いなさい。

あなたがたのために流された、われらの主イエス・キリストの血が、あなたがたの魂と身体とを守って、永遠の生命に至らせて下さるよう。キリストがあなたがたのために、その血を流して下さったことを思い出すために、感謝してこれを飲みなさい。」

古代教会以来、分餐方法はごく簡潔であった。ヒッポリュトスは「パンをさいて、ひと切れずつ渡す時には、『イエズス・キリストによる天からのパン』と言う。受ける人は『アーメン』と答える」と記す。³³⁾『使徒憲章』第8巻が描写する形式は、より簡潔なもので、「キリストのからだ。アーメン。」と、「キリストの血。いのちの杯。アーメン。」と記す。³⁴⁾東方教会の典礼は、彩りをより多くした。『聖マルコの典礼』を例に取れば、「聖なる御からだ。われらの主、神、救い主イエス・キリストの尊い血。」と述べるし、さらに、「罪のゆるしと永遠のいのちへと至らせる」を加えた。

『ヨーク典礼』や『サーレム典礼』の場合、病める者たちへの配慮のもとに、「主イエス・キリストのからだ、あなたがたのからだを心とを永遠のいのちにあって守りたまわんことを」という祈りを加えた。これらの背景を考えつつ、

1548年「聖餐式順序」を見ると、興味深い点が見つかる。陪餐者は兩種を陪餐できる。ひざまずくことを命じられるが、受領の仕方は決められていない。元来、「サーレム典礼」の分餐様式から来たものであろうが、「あなたがたのために与えられた」という句と、「あなたがたのために流された」という句とが付加された。ヘルマン文書の影響と、その背後にあるルター派教会様式の影響が考えられる。さらに、キリストの御からだ陪餐者の身体を守るようにと祈られるのに対して、その御血は陪餐者の魂を守るようにと祈られている。

【第1祈禱書】に進むと、「ひざまずき」の指図書きがなくなり、パンと杯との両方について「あなたがたの魂と身体を守り」という祈りに変わる。パンの物素は陪餐者の口にまで運ばれた。【第2祈禱書】では、大陸から招かれたり避難してきた改革者たちの影響が見られるようになり、再び、ひざまずきが命じられた。また、ブツァー(Bucer)は陪餐者が手で物素を受け取る方法を勧めたと言う。ヤン・ワスキ(または、ラスキ、Jan Laski, 1499-1560)が勧めた分餐の言葉は、「キリストがあなたがたのために死なれたことを記念するため、これを取って食べ、感謝をもって、信仰により、あなたがたの心においてキリストの養いを受けなさい。…キリストの血があなたがたのために流されたことを記念してこれを飲み、感謝に満たされなさい」であった。これらの伝統は、何らかの形で受け継がれ今日にまで至っている。

【式文】の分餐語について付言すれば、パンの分餐の時の「感謝し、信仰をもって、あなたがたの心を養いなさい」(下線、筆者)という訳文には問題を感じる。今回の【式文】改定では、大きな改正を行わずに文章の修正程度に止めるという条件を付されていたのであるが、この訳には疑問を覚えた。因に『日本メソヂスト教會禮文』の訳では、「キリストはなんじがために死(う)せ給ひしことを忘れざらんために、取りて之を食し、又感謝と信仰とをもってなんじの心に主の養いを受けよ」(下線、筆者)とある。苦勞の跡が

読み取れる訳文である。ここで、主語はあくまでも主イエス・キリスト御自身なのであって、「主に養われる」のである。それが、自分で自分の「心を養う」ことになってしまえば、正しい福音の呼びかけとはならないのではないか。

9 終禱(祝禱)

「神より出て、人のすべての思いにまさる平安が、あなたがたの心と意思とを守って、神とわれらの主イエス・キリストの愛を深く悟らせてくださるように。また、父と子と聖霊の神の祝福が、いつまでもあなたがたの上にあるように。アーメン。」

第4世紀以前の聖餐において、祝禱がささげられたという証拠は見つかっていないと言われる。⁶⁵エジプト教会の伝統との関係が深いセラピオン(350年頃)は、司式者が会衆に向かって手を差し伸べて祈る祈りに触れ、その後、東方と西方の諸教会の典礼に影響を与えたのではないかと解説されていたが、原典をたどって確認しなかった。【レオの典礼書】(6世紀に完成した。現存する最古の写本は7世紀のもの)に、super populumと呼ばれる司式者による会衆のための祝福の祈りが出てくると言う。それがすべてのミサでの祝福の祈りの原型ではなかったかとされる。【ガリア教会典礼書】では、祝禱は年中の形であったが、【グレゴリオス典礼書】では、レントの季節のみの祝福の祈りであったらしい。特別な懺悔を捧げている者たちや、退出する非陪餐者への祝福の祈りとの関連で差異が出たのかも知れない。中世期に司教が祭壇から祝福の祈りをささげる習慣が西方教会全体に定着した。ただし、その祝禱は、聖餐前に陪餐者に与えられる祈りであるという説と、聖餐の直前に教会を去る非陪餐者のための祈りであったという説とに分かれている。

このような背景を見ながら、クランマーが【第1祈禱書】に記した祝禱の内容を見ると、実に興味深いものがある。つまり、祝禱の前半は、フィリピ4:7の聖句から来たもので、1548年「聖餐式順序」では陪餐者が聖餐を受けた後で、聖

卓から去るときに祈られる祈りになっている。句の後半は、聖餐前に司教によって祈られる中世の司教祈禱の形に似通ったものである。このような祝禱が聖餐を受けた者のために必要なか、それともわが国において礼拝出席者のある人数を占めている非陪餐者への「祝禱」こそ、もっとも必要なものは、今後、十分に検討していくべき課題の一つであろう。

V おわりに―『式文』改正への提言

『式文』の軌跡をたどり、その「聖餐式祈禱文」を検討した上述の考察においても、それらの問題点を指摘したが、今、改めて二三の点を述べて将来の式文改正に役立てたい。

(1)今後、礼拝書なり式文なりを改正する場合、ウェスリが考えたように、形式を尊重しつつも形式主義に陥らないという根本的努力を継承することが大切であろう。伝統は改革を通して守られる。しかし、その場合、改革の骨子となるものを明確に把握しておくことが肝要である。われわれは繰り返して礼拝や祈禱書の歴史を点検しながら、その核心部分においては揺るがない伝統の批判的継承に励みたいのである。

(2)SS以後、『式文』への歴史において省略されてしまった「聖餐後感謝祈禱」についてである。分餐の後、すぐに祝禱をもって終わる今の形では、大きな欠落を思わざるを得ない。また、実際に聖餐にあずかりながら、陪餐以前の多くの祈りに比して、感謝の余韻の薄い不十分な終わり方をしていると感じざるを得ない。聖餐後感謝祈禱の伝統をさかのぼれば、『第2祈禱書』からSSへの過程では留められていた。また、わが国においても『禮文』では受け継がれていた。それらに記されていた祈り(私訳)は以下のようなものであった。

「主なる神、天の父よ。あなたの憐れみといつくしみにすがって、心からお願ひいたします。心碎かれたあなたのしもべたちがささげる、この讚美と感謝の供え物を受け入れてください。あなたの御子イエス・キリストの死と功(いさお)により、また、御子の血を信じる信仰によっ

て、さらにへりくだりをもってお祈りいたします。どうかわたしたちとあなたの全教会とに、罪の赦しと、御子の御受難によるすべての恵みとお与えください。

主よ、わたしたちは、わたしたち自身と、その魂とからだとを、御前に喜ばれる聖なる生きたいけにえとしてここに献げます。この聖餐にあずかったわたしたちすべてが、あなたの恵みと天よりの祝福でみたされますように。わたしたちは、そのもろもろの罪のゆえに、御前にどのようないけにえを献げるにも値しないものです。どうか、わたしたち自身の業をお量りになることなく(not weighing our merits, 『禮文』では「過去(こしかた)の如何(いかな)を問ひ給ふことなく…」と訳されている)、イエス・キリスト、わたしたちの主によって罪を赦し、今、わたしたちが献げるこの務めと奉仕とを受け入れてください。

全能の父よ、キリストによって、キリストとともに、聖霊の一致のなかに、すべてのほまれと栄光とは世々限りなくあなたにありますように。アーメン。」

陪餐後の「聖餐後感謝祈禱」を、ぜひ将来の『式文』の大幅改正の機会に入れていただきたい。先年、改正された『日本聖公会祈禱書』のように、これら感謝祈禱文の骨子を大切にしながら、「より簡略な祈りの形」にしても良からう。その際にも、その感謝祈禱がもつ神学的、礼拝学的骨子を決しておろそかにしてはならないと考える。

(3)もう一つの提言をしたい。それは最近の種々の式文が試みている聖餐祈禱文の「複数選択」についてである。先に挙げた英国メソジスト教会の式文などがその好例であるが、伝統的な聖餐の順序や式文祈禱とともに、思い切って現代的な表現を試みた簡潔な順序や祈禱文のいくつかを併記して、司式者が選択できるように工夫されている。

ただし、その際に注意すべきことが二つある。その一つは、現代的な祈りの言葉を作り、また、従来の式文を簡略化する場合に、ぜひエキュ

注

メニカルな神学的、礼拝学的検討を重ねておく必要がある。極端な例ではあろうが、「…キリストのからだと思って食べる…」という類いの式文に出合ったことがある。それは、聖餐における「象徴説」を云々する以前の問題をはらんでいく。人間中心的な考え方が聖餐の中に入ってくることへの危険性を痛感させられた。したがって、ただ現代的で分かりやすい言い回しならば良いわけではない。それは、ただ古ければよいのではないのと同じである。根本的な問題は、その祈りがもっている聖書的で神学的な中身そのものである。

次に、何のための簡略化なのかを明確にする必要がある。確かに簡潔な形の中での確かな内容を祈ることは大切であるが、ただ短くすることだけに汲々とすべきではない。ある司式者は、いくつかの聖餐祈禱を省略することによって何分くらい短くなるのかを実際に計って見たと言う。そして、2-3分も短くならない事実には啞然としたと漏らされた。礼拝式時間の短縮を考えるのであれば、数分どころか、数十分を費やしている「不要な言葉が多すぎる説教」を、聖書的で簡潔な福音説教にするように努力した方が賢明かも知れない。そして、聖餐祈禱を生かす努力を続けることが望ましい。この辺りにも、われわれが礼拝そのものをどう考えて行なっているかという、神学的で礼拝学的な問題点が潜んでいるように思えてならない。このほか、『式文』に入れるべき祈りや、短縮した形にして良い祈りもある。「エピクレシスの祈り」をどのように考えるべきか。聖霊論と聖餐論とのかかわりにおいて検討すべき課題である。エキュメニカルな立場での学びにおいて、伝統を異にする方々から多くを学びながら、世界教会の課題としての礼拝生活全体の伝統の継承を求め続けていきたい。

(1)『祈禱書』関係の諸文献をご教示くださったウイリアムス神学館長森紀旦司祭と、聖アンデレ教会の坪井克巳司祭に感謝の意を表したい。なお、祈禱書全般に関して、森紀旦編『聖公会の礼拝と祈禱書』、東京、日本聖公会出版、1989年、および、G.J.Cuming, *A History of Anglican Liturgy*, NY., Macmillan St.Martin's Press 1969が参考になる。

(2) *The Letters of the Rev. John Wesley A.M.*, (J.Telford, ed.), Vol.8, London, Epworth, 1931, p.58.

(3) Frank Baker, *John Wesley and the Church of England*, London, Epworth, 1970; Raymond E. George, "The People called Methodists—4. The means of grace", *A History of the Methodist Church in Great Britain*, (eds. Rupert Davies and Gordon Rupp), London, Epworth, 1965, pp.259-273; John C. Bowmer, *The Sacrament of the Lord's Supper in the Early Methodism*, London, Dacre Press, 1951; *John Wesley's Sunday Service of the Methodists in North America* (Methodist Bicentennial Commemorative Reprint), Nashville, TN., The United Methodist Publishing House, 1984,におけるノートルダム大学 James F. White教授の序文が参考になる。

なお、メソジストの礼拝観については、John Bishop *Methodist Worship in relation to Free Church Worship*, London, Epworth, 1950; Trevor Dearing, *Wesleyan and Tractarian Worship*, London, Epworth, 1966; J.A. Tews, *The Origin and Outcome of the Liturgies of John Wesley*, (University Microfilms International), Ann Arbor, MI., 1978を参照。

(4) *The Works of John Wesley*, Third Edition, Vol.14, Grand Rapids, MI., Baker Book House, 1978, p.304. なお、SS初版を除いたすべての版にこの文章が記されている。

(5) 説教121「預言者と祭司」(Prophets and Priests), *The Works of John Wesley* (BE.), Vol. 4, Nashville, TN., Abingdon Press, pp.75-84, 特に p.81.

(6) *The Letters*, *op. cit.*, Vol.6, p.326.

(7) *The Works of John Wesley* (BE.), *op. cit.*, Vol.20, p.357.

(8) Baker, *op. cit.*, pp.238-239.

(9) *The Works of John Wesley* (BE.), *op. cit.*, Vol.1, pp.376-397. 邦訳「ジョン・ウェスレー説教53(上)」、竿代忠

- 一、勝間田充夫、藤本 満訳、東京、イムマヌエル綜合伝道団教学局、1995年、395-428頁。
- (10) 拙稿「1784年の握手礼をめぐって」、『神学と人文』（大阪基督教短期大学紀要）第19集、1979年、1-17頁。同「トマス・克蘭マーの聖餐論」、『神学と人文』第17集、1977年、1-19頁参照。
- (11) John Wesley's Sunday Service, *op.cit.*,ii.
- (12) Bowmer, *op.cit.*,p.206.
- (13) *ibid.*,pp.207-211.
- (14) 『日本メソヂスト教会禮文資料』、更新伝道会ウェスレー研究会パンフレット No.7、更新伝道会出版委員会、1991年。西堂 昇の解説が参考になる。
- (15) John Wesley's Sunday Service, *op.cit.*,pp.125-139.
- (16) *The Book of Discipline 1979*, (The Free Methodist Church of North America), Winona Lake, Indiana, The Free Methodist Publishing House,1980:*The Methodist Service Book*, London, Methodist Publishing House,1975.
- (17) *The Alternative Service Book 1980*, London, SPCKおよび、R.C.D.Jasper and Paul F. Bradshaw, *A Companion to the Alternative Service Book*, London, SPCK,1986.
- 特に後者に多くを教えられた。このほか、*The Book of Common Prayer*, NY., Seabury Press, 1979, とその解説書、Marion J. Hatchett, *Commentary on the American Prayer Book*, NY., Seabury, 1981 も参考になる。聖餐祈禱文については、*Twenty-five Consecration Prayers*, NY., Macmillan, 1944. が有用である。Massey H. Shepherd, Jr., *The Oxford American Prayer Book Commentary*, NY., Oxford Univ. Press, 1950 は、優れた研究書である。
- なお、『第1 祈禱書』と『第2 祈禱書』の対比には、*The First and Second Books of Edward VI*, London, Everyman's Library, 1968 が便利である。
- (18) J.G.Davies, *A Dictionary of Liturgy and Worship*, London, SCM., pp.317-318 を参照。
- (19) 森 謙『信仰を生活する』、前編、東京、日本聖公会出版部、1968年、152頁。
- (20) John Henry Blunt, *The Annotated Book of Common Prayer*, N.Y., E.P.Dutton & Co., 1916.p.384.
- (21) シェパード著、八代 斌助訳『教会の礼拝』、東京、日本聖公会出版部、1966年、221頁。
- (22) N.B.Harmon, "John Wesley's Sunday Service and its American Revisions", *Proceedings of the Wesley Historical Society*, Vol.,39, Pt.5, London, Wesley Historical Society, 1974, pp.137-138.
- (23) J.A.ユングマン、『ミサ』、福地 幹男訳、東京、オリエンズ宗教研究所、1992年、195-203頁。
- (24) 相澤 誠四郎、『聖なるドラマ』、東京、日本聖公会出版部、1975年、192頁。
- (25) 岸本羊一、北村宗次編、『キリスト教礼拝辞典』、東京、日本基督教団出版局、1977年、232頁。
- (26) 『使徒教父文書《聖書の世界》別巻4・新約Ⅱ』、東京、講談社、1974年、75頁。
- (27) *The Ante-Nicene Fathers* (eds., A. Roberts & J. Donaldson), Vol.7, Grand Rapids, MI., Eerdmans, 1970, pp.490-491.
- (28) Jasper & Bradshaw, *op.cit.*, p.203.
- (29) 岸本、北村編、上掲書、233頁。
- (30) 『キリスト教教父著作集 1 ユスティノス』、柴田有訳、東京、教文館、1992年、84頁。
- (31) ユングマン、上掲書、235-236頁。
- (32) 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承-B.ボットの批判版による初訳』、土屋 吉正訳、東京、オリエンズ宗教研究所、1987年、16-17頁。
- 『秘跡』、熊谷賢二訳（キリスト教古典叢書3）、東京、創文社、1963年、111-118頁。
- (33) 『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』、上掲書、57頁。
- (34) *The Ante-Nicene Fathers*, *op.cit.*, pp.490-491.
- (35) Jasper & Bradshaw, *op.cit.*, pp.244-245.